

グローバル化時代の光化学協会

Japanese Photochemistry Association in Global Era

台湾・国立交通大学理学院 増原宏
National Chiao Tung University, Taiwan
Hiroshi MASUHARA

大学のグローバル化が世界各国で推進されており、アジアでも大学のランキング付けが盛んである。光化学協会（JPA）もこの流れに巻き込まれるのは必然である。JPAはこの機をとらえて国際的影響力を発揮し、JPAメンバーは新しいタイプの研究者になっていただきたいと願い、一研究者として見て聞いて感じていることを記す。

私は2008年から台湾新竹市にある国立交通大学で研究と教育に携わっている。2005年ごろから北京でも、ソウルでも、台北でも、「もう20、30年したら我々も日本に追いつく」、「こちらに来てヘルプしてください」、と言われた。私はいつも「ヘルプはないでしょう、コラボレーションをしましょう」と答えてきた。礼儀上の理由でヘルプという言葉を使わなかったのではなく、本来研究は国の個人の独創性を大切にすることで、追いつくとかヘルプの問題でないと思っており、またアジア諸国の大学の国際化は日本よりすごいと感じていたからである。

着任後の数年間、素人目にも経済は活発で、台湾の町は大きく変化してきた。この流れに対応して、大学のグローバル化を進める台湾教育部（部は省のこと）は、そのものずばりのAiming-Top-University (ATU) Programを推進し、これをベースに国立交通大学は日本人教員、研究者を多数雇用してきた。交通大は日本人教員が多いので有名な大学となった。ATUプログラムの結果はどうか、国立交通大学の2016年のアジアランキングは31番、これより高い日本の大学は5校しかない。

私が台湾に来てからの9年間に、NECのパソコン、三洋の家電製品は中国にわたり、シャープは台湾の鴻海の傘下に入った。パソコン、スマートフォン、家電商品、自動車のように、世界中が同じ基準で価値判断される各種製品、製造技術などにおいては先進国に追いつくスピードが速い。それを売るビジネスでは素早いキャッチアップも可能だ。しかし研究と教育は簡単ではない。探索研究により示された可能性を具体化する実現研究は、アジア諸国が研究費とマンパワーをかけても、日本に並び、追い越してくるであろう。しかし新しい価値基準を作り出す探索研究は、科学の歴史やその総合的理解、文化や習慣、それに由来する思考法に基づくので、急に追いつき追い越すことはできない。あくまで私の見た経験した範囲内の話であるが、アジアの諸国が近いうちに科学研究の独創性で日本を追い越すとは思えない。「もう20、30年したら我々も日本に追いつく」と言われた2005年からもう10年以上たつが、今でも

「日本に追いつくにはあと20、30年かかるかもしれない」という言葉を聞く。やはり日本の優位性はしばらく動かないといえそうだ。

しかし本来追いついたとかまだ日本は勝っているとの議論はよろしくないと思う。グローバル化により、研究の発想、課題、推進など研究に関して、多様化が進んだ、より多くの選択肢が増えたと考えるようになった。日本の強いところはますます強くすべきだし、各国もそれぞれの特徴を生かして、独自性を発揮してくるだろうと感じる。それを踏まえて、いかに一研究者として日本と台湾両国の大学のグローバル化に貢献するかが私の役割であった。具体的には、サマースクールやワークショップの開催13件、共同研究の立ち上げやサポート20件、滞在、訪問、あるいは講演していただいた研究者・院生は200人以上、学位を台湾と外国で二つ取得するDual Degree Program (DDP)の院生3人、長期滞在してくれたJSPSの日本人ポスドク4人がその成果である。JPAの関係者も多く、グローバル化時代における日台お互いの立ち位置の理解が進んだのではないかと考えている。

院生、教員が文化習慣の異なる日台両国の研究機関に同時に属し、行き来しながら共同研究を行う、これが今後の方向と考えている。DDPを広げ、次には教員が両国の二つの大学に研究室・研究グループを持ち、両国から研究費を受け取るDouble Appointment (DA)に入るのが有効である。幸い私はそれに近い研究推進、研究室運営を国立交通大学と奈良先端大の間で数年間経験させてもらった。科学の独自性もグローバルな多様性があるからこそより磨かれると感じた。

社会が発展すればするほど科学的好奇心は高まり、科学的思考は必要となる。経済が進歩していけばいくほど、科学技術における新概念や新手法が強く要求される。本来の基礎研究、高度な学問のニーズは、これから数十年、アジアでますます高まっていく。DDP, DAを通してその要求に答える中で、ポジションのチャンスも、光化学研究とJPAのニーズもますます高まっていると感じている。

まずはらひろし

略歴： 東北大理学部化学科卒、同修士修了、阪大基礎工博士修了（工学博士）。阪大助手、京都工織大教授、阪大応物教授、濱野生命科学財団主席研究員、奈良先端大特任教授を経て現研究機関講座教授。2000年光化学協会長、2002年アジア光化学協会長。1989年光化学協会賞、2006年日本化学会賞、ポーターメダル、2008年紫綬褒章。